

## 序

本書は、一般に翻訳と呼ばれる事象について、現代翻訳研究に加え、接触言語研究や社会言語学、言語人類学、リテラシー研究、言語教育学、宗教研究、歴史学、文化人類学などの多岐にわたる分野の知見を幅広く、三角測量的に照らし合わせ、それらをコミュニケーションという視座を軸に総合／体系化することによって考察するものである。特に翻訳を、「接触」という出来事を基点に広がるコミュニケーションの地平、社会・文化・言語空間で生起する記号過程の一種として記述・分析する点に本書の特徴がある。すなわち、人間および言語に関わる他の全ての現象と同様、翻訳の基底にも接触によって生じるコミュニケーションという出来事——固有性、偶発性、あるいは多様性の契機——があり、よってコミュニケーションという出来事を基点に言語と社会文化の全体にアプローチする視座、本書で言及する社会記号論系のコミュニケーション論に基づいて、翻訳は研究されねばならない、というテーゼを本書は主張する。

\*\*\*

以下、そのような命題・方法論の存立理由について簡単な説明を施したい。コミュニケーションとは、特定の、固有性を持った社会的コンテクストで生起する出来事である。そこでは何らかのこと——相互行為——が為されている。たとえば、その特定のコミュニケーション出来事の参加者たちのアイデンティティや権力関係が指し示され、そして、そのコミュニケーション出来事がどのようなタイプやジャンルに属する出来事であるか、あるいは、そのコミュニケーション出来事が起こっている社会的コンテクストがどのような性格のものであるか、など、これらさまざまな事象が、コミュニケーション出来事において指し示されている。社会記号論系のコミュニケーション論では、このような指し示しのことを相互行為的指標、ないし社会指標性という。

もちろん、社会指標性だけがコミュニケーション出来事の全てではない。コミュニケーション出来事では、「何かが為されている」のみならず、「何かが言われ」もする。つまり、「誰々が何をした」などといったことがコミュニケーションにおいて言われたりする。これを言及指示的指標という。言語哲学や言語学の術語を使えば、言及指示 (reference) と述定 (tensed and modalized predication)、つまり命題に関わるものが、言及指示的指標である。

この兩者、すなわち相互行為的指標と言及指示的指標とは、その位相が互いに異なる。たとえば、相互行為的指標は、主に、今ここで行われているコミュニケーション出来事に関わるが、言及指示的指標は、今ここで起こっていることだけでなく、過去に起こったことや未来に起こるかもしれないこと、あるいは、恒常的命題などと呼ばれる一般的な「真理」(「2足す2は4である」、「人間は動物の一種である」など)を指し示すこともできる。このように相互行為的指標と言及指示的指標は互いに異なった次元を成すが、しかし兩者は全く別々に生起しているのではなく、兩者の間には一定の相関性も存在する。

それらの相関のうち、最も重要なものは、言及指示的指標が、たとえば一人称／二人称代名詞や時制、「今」、「明日」、「昨日」、「ここ」、「あそこ」など、ダイクシス ((deixis) 直示) と呼ばれる表現をとおして——あるいは、より隠然としたかたちでは、発話者や聞き手などのコンテクスト的要素をとおして——常に発話の場 (speech event)、コミュニケーションのコンテクストへと投錨されている、ということである。つまり、言及指示的指標は、社会指標とは異なり、今、ここで起こっているコミュニケーション出来事の彼岸に位置する物事——過去や未来、恒常的真理などに属する物事——を直截に指し示すことができるのだが、それにもかかわらず、言及指示的指標は、コミュニケーション出来事の今ここ、社会指標が為されている発話の場面へと、ダイクシスなどをとおして繋がっているのである。

このように、コミュニケーションという出来事は、社会指標と言及指示的指標という2つの側面を同時に伴って生起している。さらに、コミュニケーション出来事は、それ自体への内に閉ざされたものではなく、もちろん、他のコミュニケーション出来事やそこで言われたことや為されたこととも結びついて構成されている。言い換えれば、コミュニケーション出来事は他のコミュニケー

ションを指し示し、部分的には、そのような指し示しをとおして構成されているのである。このようにコミュニケーションを指し示すコミュニケーションの機能を「メタ・コミュニケーション」(*meta-communication*)、あるいは「メタ語用」(*meta-pragmatics*)という<sup>1</sup>。これは、文芸批評などにいう「間テキスト性」(*inter-textuality*)と類似した概念である。また、コミュニケーション出来事が構成・構造化されることを「テキスト化」(*en-textualization*)と呼び、そのようにして構成・構造化(テキスト化)されたコミュニケーションのことを「テキスト」(*text*)と呼ぶ。コミュニケーションには言語指示と社会指標(相互行為)、以上、2つの側面があるのだから、コミュニケーションのテキストにも、言語指示のテキストと相互行為のテキスト、これら両者が存在することになる。そして、これら2種類のテキスト、両者にとって、メタ語用が、その主要な構成原理となっているのである<sup>2</sup>。

重要なことは、翻訳という事象がコミュニケーションの一種であるかぎり、上記したようなコミュニケーションの記号作用としての特性は翻訳においても見られるはず、という点である。本書では、このような洞察に基づいて、メタ語用の概念を基軸に、翻訳および翻訳にまつわる研究の有り様について考察を進めていくこととなる。

このように、翻訳がコミュニケーションの一種であるとして、それでは、翻訳にはそれ自体としての何か特有の性質はないのだろうか。つまり、翻訳を他のコミュニケーションから弁別する特徴はないのか。本書で詳説するように、翻訳には、記号間翻訳(*inter-semiotic translation*)、言語間翻訳(*inter-lingual translation*)、そして言語内翻訳(*intra-lingual translation*)、以上の三種があるが、これらは全て、主に上で見たような特徴、すなわち、コミュニケーション出来事に根差したメタ語用過程である、という点では同一である。そして、コミュニケーションであるかぎり、翻訳もまた、他の全てのコミュニケーションと同様、何かを指し示す。だが、その対象、つまり指し示されるものと、他方、指し示すもの(翻訳行為)との間に何らかの類似性、何らかの程度の等価性(*equivalence*)——記号論でいう類像性(*iconicity*)——があるものとして翻訳は自らを指し示すのであり、ここに翻訳というコミュニケーションの弁別的な特徴の1つが見い出される。つまり翻訳は、それが指し示すものと自らとの間

に何らかの言及指示的あるいは社会指標的な類似性・等価性・類像性があることを前提としたり、あるいは、そのような類似性・等価性・類像性を作り出したりするのである。コミュニケーションの記号論では、前者を前提的指標 (presupposing indexicality)、後者を創出的指標 (entailing indexicality) と呼ぶが、ここで重要なのは、その指し示されるものは、書物や「言われたこと」である必要はなく、ジャンルやレジスター、特定のしゃべり方やスタイル、木々のざわめきや動物の鳴き声、物音や聖霊の様態、それに伴う情動や感情、つまり言及指示的ないし社会指標的な事象の全てでありうるということである。つまり、翻訳は、引用、口真似、物真似、あるいは憑依と同種のコミュニケーションなのである<sup>3</sup>。そしてまた、翻訳は、憑依などと同様、今ここに存在しない何物か、たとえば天上の神のことばや聖霊のバプテスマでの異言のような異界・彼岸に属するものを今ここのコミュニケーションで体現する出来事、異界・彼岸と今ここの間に類像性・等価性を前提的、ないし創出的に指標する出来事、すなわち儀礼なのである。

しかし、上に挙げた三種の翻訳のうち、特に言語間翻訳は、その対象を、コミュニケーションに関与するさまざまな記号体ではなく言語のみに狭隘に絞る性向を示す。また、そのような言語間翻訳に焦点化する翻訳実践や翻訳研究は、コミュニケーションの社会指標的次元ではなく言及指示的次元に、そしてコンテキストではなくテキストに、限定的に焦点を当てる傾向が顕著である。さらに、そこでは言語間翻訳の「言語」が、コミュニケーションに関わるさまざまな言語変種、たとえばピジン／クレオールやコード・スイッチング変種のような混淆的言語変種ではなく、「標準語」や「国語」へと恣意的な偏りを示す傾向が強く見られる。そのような偏りは、これまで言語人類学的なイデオロギー論が詳らかにしてきたように、イデオロギー性の顕著な現象、すなわち、近代社会に特徴的に現れたナショナリズムに強く彩られた事象となっている (小山, 2011a)。

すなわち、本書では、近現代の翻訳実践や翻訳研究の多くが、一般に、「翻訳」を社会指標機能ではなく言及指示機能に——参加者たちの社会集团的帰属や力関係の指標など、コミュニケーションで「何が為されているか」に関わる社会指標機能ではなく、「何が言われているか」に関わる言及指示機能に——

基づいて解釈してきたこと、そして近現代の翻訳実践や翻訳研究の多くが「翻訳」を国民国家、民族言語、民族文化に基づいて理解し、言文一致体（標準語）や少数民族言語文化などを機軸として「翻訳」を捉えてきたこと、以上を確認する。つまり、近現代の翻訳とその研究の多くは、実質上、言及指示機能中心主義と言語ナショナリズムというイデオロギーを介してのみ生起可能なものであると論じる。それに対して、記号論者／言語学者であり、ロシア未来派の詩人でもあったローマン・ヤコブソン（Roman Jakobson）がいう「一般化された翻訳」、つまり記号論的な意味での「翻訳」は——ヤコブソンの薫陶を受けた言語人類学者マイケル・シルヴァステイン（Michael Silverstein）がいうとおり——、ラング（言語）ではなくパロール（語用）、言及指示機能ではなく社会指標機能・コミュニケーション出来事、テキストではなく（コン）テキスト化の過程に主に関わる現象であることを明記する。

そして本書では、このような理解に基づき、翻訳研究や翻訳論の中心的な主題の1つである翻訳不可能性の問題について論じ、翻訳不可能性は、主に、言及指示的な意味のコードである言語構造ではなく言語使用、言及指示機能ではなく社会指標機能、たとえば言語変種、社会言語学的多様性（変異）、そして最も根本的にはコミュニケーション出来事の固有性・偶発性（haecceitas）と結びついていることを指摘する。つまり、翻訳不可能性の根底には、言語、特に言語使用（語用）が示す出来事としての性格があり<sup>4</sup>、そして出来事（出来事性）とは、固有性、偶発性——ひいては多様性——以外の何物でもない<sup>5</sup>と論じる。

\*\*\*

以上が本書の梗概である。上記のような命題・方法論に依拠することにより、本書は、言及指示的に「言われたこと」やその「テキスト」、そしてナショナルな「言語」（国語、標準語、民族語など）に焦点を据えた（狭義の）翻訳研究、および（狭義の）言語やコミュニケーションに関する研究・学知にとっては、本来的な道を踏み外した、逸脱した領分まで、その射程に含み込んだものとなっていることは間違いない。その主たる理由は、言うまでもなく、言語研究は社会文化の研究であり、それ以外ではありえないという言語人類学的な命

題に基づき本書が編成されていることにある。言い換えれば、翻訳を含む言語の研究は、言語やコミュニケーションの記述・分析に基軸を据えつつ——そこから一歩たりとて離れることなく——他方で、限界なしに、社会文化という広大な分野に向かって常に進み続けねばならず、それこそが言語研究、ひいては翻訳研究の存在理由である、と考えるからに他ならない。もし本書が、部分的にはあれ、この命題を体現するものであるとすれば、その逸脱の誹りは本書の著者・編者にとって本望でさえある。

## 注

- 1 もちろん、他のコミュニケーションではなく、そのコミュニケーション自体を指し示す機能もメタ語用に含まれる。たとえば、「これは冗談ですが、～～」とか、「約束いたします」などといった言及指示的に明示的なもの、あるいは、奇妙な笑みを浮かべながら誰かを褒めることにより、今、行っている言語行為は皮肉であることを示すなどといった「コンテクスト化の合図」(contextualization cue)、韻を多用したことばを使うことによって、今、行っているコミュニケーションが日常的・散文的な語りではないことを示す「詩的言語」(poetic language)の使用、インフォーマルなレジスターを用いることにより、今、行っているコミュニケーションが、親しい者たちとのくだけた会話であることを示す、などといった言及指示的に非明示的なもの、これらは全てメタ語用的なコミュニケーションとなっている。
 

このように、コミュニケーションについてのコミュニケーション、つまり、コミュニケーションの性格——そのコミュニケーションで何が行われているか／言われているか——についてコミュニケートすることが「メタ語用」と呼ばれる。そして、その特殊な下位範疇として「メタ意味論」的コミュニケーションと呼ばれるものがある。後者は、語彙や文法、概念など、言語や概念体系が持つ意味論的な要素についてコミュニケートするものである。たとえば、『捨象』ということばの意味は～～、「人間は哺乳類である」、「格助詞や取り立て詞は名詞の直後に来る」などといった言及指示的に明示的なものや、そのような言語や概念体系の持つ規則性に従ったコミュニケーションを行うことにより、その規則性を非明示的に指し示すものなどが、メタ意味論的なコミュニケーションを成している(小山、2012)。
- 2 テキストを構成する主要な原理には、メタ語用的機能に加え、詩的機能もある。詩的機能とは、同じ、ないし類似した範疇(範列／パラダイム)に属するとされるユニットが連辞軸上に(コンテクストにおいて)反復して生起し、それをとおしてコミュニケーションがユニット化(テキスト化、構造化)されることを意味する。たとえば、韻律的なユニットが反復して生起して一定のパターンを構成することにより韻文的テキストが形成される、ターンや隣接ペアなどの相互行為的ユニットが反復して生起して一定のパターンを成すことにより相互行為のテキストが形成される、あるいは、フォーマルな言語変種／レジスターに属する語彙などの言語的変異体(variants)が繰り返して生起することにより、相互行為(コミュニケーション)の特性が指し示される——そのコミュニケーションがどのようなタイプのコミュニケーションか、その特性が限定化／テキスト化される——などといったものが詩的機能の事例となる(小山、2012)。
- 3 翻訳に特徴的に見られる「引用」という語用論的特性は、もちろん、より薄められたかたちではあれ、狭義の翻訳以外のコミュニケーションにも見られ、実際、引用はコミュニケーション一般を特徴づける語用論的要素となっている

(Silverstein and Urban, 1996; 小山, 2012)。そのようにして翻訳は、紛うことなく一般的なコミュニケーションの特性を示すものであると同時に、その特性を例外的に卓立して示すものとなっており、後者が翻訳の弁別的な特徴を成しているのである。

以上のような翻訳、引用、コミュニケーションの関係性に関連して、以下の点を注記しておく。すなわち、全ての言説は少なくとも部分的には引用であるというミハエル・バフチン (Mikhail Mikhailovich Bakhtin) の洞察に基づいた翻訳論を展開している本書は、その歴史記述に関する部分においても、本書が「引用=翻訳の織物」であることを明示的に示す／認めるものとなっている。事実、歴史研究は、それが何らかの実証性を持つかぎり、史料となる文献や証言などに依拠せざるをえず、したがって間接引用ないし直接引用を不可避的に包含せざるをえない。しかし、歴史学の論文や著作の多くでは、いわば読み物としての特性、ナラティブとしての性格が際立って重視され、史料の言説の直接引用である(べき)ものが間接引用へ、さらには非引用文や脚註、参考文献へと転換・収縮されることにより、「読み物」としての結束性や一貫性、まとまりが——ひいては、そのテキストが歴史家による「著作」、「著書」というカテゴリーに属するものであるとする社会的範疇化／位置づけが——作り出されている。近代において「著者」、「著作」という機構に附与された権威・権力に鑑みれば、そのような修辭的操作が一般に為され、標準的規範と化していることは、いわば自然なことであるともいえるが、他方で、そのような言説の体制によって、歴史記述が翻訳=引用であるという記号論的な、コミュニケーション論的な事実が隠蔽・不可視化されてしまっていることには十分な注意が払われる必要がある。したがって、翻訳論を展開している本書のうちで特に歴史記述を行っている部分では、近代歴史学に見られる上記のような陥穽を部分的に回避するために、直接引用に近い間接引用を多用した。また、それを明示的に示す構成・論述、修辭的操作を施している。以上、留意されたい。

- 4 翻訳における主体性(行為者性 (agency)) の所在を、行為主体となる人間のみではなく、それも含む出来事自体に見い出している Harvey (2014 [2003]: 69) などを参看されたい。